

キー・コンピテンシーを参考に 作り上げたコア・カリキュラムを 学力育成の柱にする

大阪府立柴島高校

長年取り組んできた 人権教育

大阪府立柴島高校の教育の柱は「人権教育」。生徒一人ひとりを大切に、個々もつて力を伸ばしていこうという姿勢は、創立以来ずっと変わっていない。

課題のある生徒も少なくない同校。生徒たちに対しても、一人ひとりが違うし違っていていい、それを認識し個性を認め合おうと働きかけてきた。2・3年生の代表数名が全校生徒の前で自己開示する「学校開き」や、1年生が深く語り合い、互いに理解し合うための「HR合宿」は伝統的な行事だ。

そのような学校が1996年に普通科から総合学科に改編したとき、産業社会と人間から課題研究という流れを学習のコアとして、これからの子どもたちに本当に必要だと思われる力をつけていきたいと考えた。そして、当時、同和教育主担で現在は同校の校長である山崎為伯先生が中心となり、地域の小学校や中学校とも

一緒に必要となつて必要な力とは何かを模索し続けていたときに教育界に登場したのが、OECDの「能力の定義と選択」プロジェクトにより生まれた新たな能力概念「キー・コンピテンシー」。それは同校が長年取り組んできた教育とまったく矛盾するところではなかった。そこで、子どもたちにつけるべき力、学力育成の柱として取り入れることにしたのである。

授業者と評価者の役割分担で 力がついているかをチェック

①相互的に道具・知識・情報を活用する力、②多様性のある集団(社会・枠組み)で活動する力、③自分をコントロールし自律的に行動する力…これら3つのキー・コンピテンシーを育てるための授業として、ライブプランニング(1年次)→Gプロジェクト(2年次)→Kプロジェクト(3年次)という流れを作り、「コア・カリキュラム」として実践を重ねてきた。



「協働」リーダー
小川建治先生

School Data

1975年創立／総合学科／生徒数848人(男子220人・女子628人)／進路状況(2012年度実績)大学31.5%・短大11.7%・専門学校43.6%・就職11.0%・その他2.2%

それを、今年度からライブプランニング(1年次)→協働(2年前期)→探求2年(後期)→プレゼンテーション(3年前期)→ゼミナール(希望者)という形に変更している。協働はGプロジェクトと同じグループ学習、探求はあるテーマを探索していくための方法を学ぶ授業、そしてプレゼンを学び、さらにテーマ学習を深めたい者は少数ゼミに移行するという予定だ。

「協働」の授業では、高校生向けの商品を作りたいたい企業から出される課題に対して、4人ずつのグループでプランを練り企画書を作り企業に提案する。企業には商品化される可能性のある課題を出してもらい、過去にはパンなどが実際に商品化されている。

この「協働」の授業で生徒につけたい力は企画力やマーケティング力ではなく、キー・コンピテンシーに準ずるコミュニケーション力、情報活用力、表現力である。それを正しく評価するため、「協働」では、授業担当と評価担当の2人の教員が常にチームを組む。評価者は授業中、気がついた生徒

の様子を評価用紙(図1)に書き込み、その他の提出物などと合わせて、最終的にコメントにて評価をする。そのコメント例もすでに決まっております(図2)。これをいくつか組み合わせて評価をすればよい。「コメント例を作ったのは評価作業の省力化のためだけでなく、事前にどんなところに着目して評価すべきか、この授業でどんな力をつけたいかを学年の共通認識として持ったからです」と言うのは小川建治先生。同校では協働、探求、プレゼンでそれぞれリーダーを決め、学年ごとに取り組んでいくことにしており、小川先生は今年度初めて取り組む協働のリーダーを務めている。

日々の生活にも 目標を取り入れ振り返る

教員はもちろんのこと生徒にも事前に、どんな力をつけるためにこの授業を行うのかを周知し、一連の授業が終われば、想定した力がついているかどうかを確認する。例えば生徒にアンケートをとり、力がついていた実感があるかどうかを調査する。すると、自分と違う意見を尊重することができた、話し合うことができたなど、多くの生徒が自分に力がついたことをきちんと実感できているのだそうだ。

柴島高校のこのやり方は授業だけにどまらない。同校では学年ごとに学校生活における目標を定める。これもキー・コンピテンシーに基づいて決め、現2年生の

学習意欲を高め学力につなげる授業改革

chapter.2: 学習意欲・学力向上を目指した多彩な授業実践例

38期生の大目標は「考動力」。ただし、これまで、ことあるごとに「考動力」と言っはきたものの、言うだけではなかなか実行に移せないということで、今年度からは考動シート(図3)を作った。大目標と中目標は決まっているが、小目標を決めるのは生徒たち自身。「忘れ物をしない」「友達と協力する」など具体的な小目標をそれぞれシートに書き込み、3カ月ごとにその達成状況を見直す。この作業を卒業まで続けてみることにした。

「どうすればいい力が日々の生活やほかの教科、また将来に生かされていくか、日々試行錯誤して、評価項目案や考動シートはそのための一案です。求める力が本当についているのか、なかなか数値化はできませんが、学年が上がるにつれ、ほかの人の意見を聞いたり、資料をまとめたり、考えたことを言葉にして発表したりという力が確実に向上していることがわかります」と小川先生は言う。

本当に大切なのは、「生徒たちが『できるようにになった』『どういうふうになれば乗り越えられる』と実感できること」と言うのは山崎校長先生。「例えば、行事で何かもめごとが起これたら、その解決法はコア・カリキュラムの授業で身につかなかったか、生徒に聞いかけます。測定できない力をどう授業で作っていくか、頭を悩ませながら工夫をしています。理想を持っていないとそこには近づけないという気持ちで、今後も取り組んでいきたいと思っています」

図1 2学年「協働」評価用紙

ダウンロード可

評価項目	評価	コメント
1 発表 発表	◎	資料自身で制作
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

... (どうしてその結果になったか) ...

評価項目	A	B	C	D
1 発表 発表	◎	◎	◎	◎
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				

A・B・C・Dは評価基準を指し、◎は評価基準に到達している。

図2 2学年「協働」評価項目案

- ダウンロード可
- コミュニケーション力について (プラス評価)**
- 1 前向きな発言で、グループワークを活性化させた。
 - 2 グループ内での役割を適度で引き受けた。
 - 3 グループ内で、他者の意見を受け入れながら企画をまとめた。
- コミュニケーション力について (マイナス評価)**
- 4 グループ内で、消極的な場面が多く見られた。
 - 5 自分本位の発言を多くし、もっとグループに貢献するよう努めよう。
 - 6 グループ内で自分が果たせる役割が何かを、もっと考えよう。
- 情報活用能力について (プラス評価)**
- 7 企画に役立つ情報を収集し、グループに貢献した。
 - 8 情報を適切に分析し、企画に生かした。
 - 9 企業や他グループからのアドバイスを、企画に生かした。
- 情報活用能力について (マイナス評価)**
- 10 もっと積極的に情報を収集するよう。
 - 11 収集した情報をうまく活用できなかった。
 - 12 企業や他グループからのアドバイスをうまく取り入れよう。
- 表現力について (プラス評価)**
- 13 柔軟な発想で、新しい企画を考案した。
 - 14 資料や企画書の作成において、表現力を発揮した。
 - 15 聴衆を引きつけるプレゼンができた。
- 表現力について (マイナス評価)**
- 16 発想力を磨く必要がある。
 - 17 資料や企画書の作成方法を見直す必要がある。
 - 18 プレゼンで、改善・工夫すべき点が見られた。

実践のヒント

評価に専念することで、なるべく多くの生徒に目配りをする。

◎ 評価者は授業中、

どんなところをチェックするのですか

全員を見ることはできないので、発言や、家で調べてきた資料を持っているなど、気づいたときに書き留めます。グループ学

◎ 他の教科への影響は？

コア・カリキュラムはチームティーチングなので、とても多くの先生がかかわりま

図3 学年目標「考動」シート

ダウンロード可

学年目標	自分の目標 (記入日: 月 日)	2年生 目標 (日)
学力をつけ、それを活かせるようになる	自分の目標「考動」計画 ・1週間「読書」を習慣にする。 ・先生が教えるだけでなく、自分で考える。 ・わからないところは、積極的に先生に聞いて、わからなくなりにしない。	①計画の進捗 ②今頃について
自分自身のコントロールができるようになる	自分の目標「考動」計画 ・1日3食必ず食べる。 ・遅刻しない。遅刻が起きないようにする。 ・言葉遣いに気を配る。	①計画の進捗 ②今頃について
多様な人々と共に考え、実行し、成果を出せるようになる	自分の目標「考動」計画 ・グループで活動するときは、役割分担をする。役割の1つは、自分から参加する。 ・自分の得意分野を、グループに伝える。 ・意見をしっかりと伝える。	①計画の進捗 ②今頃について

クラス全員の分をファイリングし、教室に置いてあるので、友達の分も見ることができる。大目標が考動力、左列は中目標、手書き文字は生徒それぞれの小目標。



学校案内は卒業生の遠藤翔一さんが制作。選択授業で和菓子屋さん共同開発した商品のポスターを制作し、みんなにほめられたことがきっかけで芸術系の学校に進学。卒業制作で母校の学校案内を制作した。表紙のカラフルなドットは一人ひとりの個性を表している。遠藤さんは現在も同校の様々なプロジェクトを手がけ、プロのグラフィックデザイナー・フォトグラファーとして活躍中。



グループ学習から実際に商品化されたパン(神戸屋)と、今年の企業からの課題の一例。

す。コア・カリキュラムを経験して、自身の教科でもグループ学習などの手法を取り入れる先生は多いようです。私自身も商業科目の「販売士」の授業では、グループごとにページを割り当てて生徒が授業をするというスタイルをとっています。担当ページの前後のページもよく勉強するようになったり、教員がただ教えるだけの授業より集中するなどの効果があります。